

十年後の家族へ

群馬県立利根実業高等学校 3年 井上 雄斗

二〇一七年七月十日三時限十一時三十分、この手紙を書き始めた。この手紙を見ているということはあなたが俺の家族か、あるいはあなたが友達で俺が引き出しの奥にしまっておいたこの手紙を見て俺を茶化するだろう。

高校三年生の夏、就職先や資格取得に奮闘し、時々未来への不安に襲われる。そんな今に前文で想像して書いたような温かい様子を思い浮かべると心の緊張が少しほぐれるような気がする。

十年前の俺は就職という人生の大きな選択の中で不安になったり友達とふざけあつたりして未来の家族のことを想像することなんてほとんどなかったけれど、この手紙を機に考えてみようと思った。

今いる家族はもちろん健在で、今はあまり話さず、気も全く合わない弟も成長して社会人になっていたり、高校生活を送っていたりするのである。親父や母ちゃんも五十代になっていくけれどすっかり親孝行できているといいな。

今は女性の影なんて全くないけれど二十七にもなったら嫁をもらって、子供も居たらいいなと思う。嫁とは趣味が合って、大好きな旅行なんかと一緒に楽しめていたらいいと思う。子供とも一緒に遊んだり、ご飯を食べたり、共に過ごすことのできる時間を大切にして、皆で楽しい日々を送れたらと思う。

今こうして未来の自分の生活を考えて文にすると楽しいことや嬉しいこと、キラキラした光景が浮かぶけれど、その光景を実際にこの目で見るためには自分はもちろん、この手紙を読んでいる家族に大きな苦勞をかけることになるのだと思う。今だって学校に通うために毎月高いバス代を出してもらったり、毎日弁当を作ってもらったり。新しい家族ができて、仕事を優先してしまうようなことがあるかもしれない。子供や妻と素直な気持ちでふれ合えないかもしれない。思っていることをしっかりと伝えられないかもしれない。でも、俺は家族のことを大切に思っているし、家族のみんなも俺を信じてくれていると思う。

そして俺は今も、未来でもみんなのその気持ちを無駄にしないよう努力しようとしているし、これからも一層頑張りたいと思っている。

今まで支えてきてくれた家族に感謝を。そしてこれから支えてくれる家族を次は俺が支えて、きつとこれからできる新しい家族を必ず幸せにできるように精一杯頑張るから、これからもよろしくお願いします。